

韓国「建国」の起源を探る

小野 容照著

本書は朝鮮近代史研究者による一九一九年の三一独立運動に関する研究であるが、一九四五年以後の朝鮮半島の現代史を研究する評者のような者にとっても、関心を惹く魅力的な著書である。朝鮮近代史研究に内在して評価する学問的

東京大学教授

木宮 正史評

力量を評者は持ち合わせていないので、ここでは、現在においても韓国で展開される歴史認識をめぐる論争に照らして本書の意義を論じてみる。

韓国（大韓民国）の起源は当然の如く一九四八年八

月の大韓民国の建国たいうのが従来通説であった。しかし、この大韓民国は、日本の植民地支配からの解放後、米ソの分割占領を経て成立した分断国家であり、「あるべき国家」ではなかった。当初は、北朝鮮よりも劣勢であったが、南北体制競争を「勝ち抜き」ことで、現在では韓国主導の統一の可能性が高まっている。

二〇〇〇年代に入り、保守勢力と進歩リベラル勢力との間で歴史観の違いが先鋭化する。顕著な違いは民主化以前の「独裁」をどう評価するかということである。発展のためには「独裁」はやむを得なかったと評価する保守に対して、「独裁」を肯定することはでき

ないと進歩は主張する。また、保守は、分断国家はやむを得ない選択であったと主張するが、進歩は分断以前の「あるべき国家」の起源として一九一九年の「大韓民国臨時政府」に注目する。

現在韓国で展開される保守と進歩の歴史認識をめぐる論争に関して、三一独立運動と、その帰結としての「大韓民国臨時政府」への評価が、なぜ、どのように重要なかを、本書は明らかにする。分断と統一をめぐって朝鮮のナシヨナリズムは展開されるのだが、左右を含む多様な朝鮮ナシヨナリズムが三一独立運動と「大韓民国臨時政府」という形で収斂しながらも、その後どのような政治力学が働いて分岐していったのかを解明する。

最後に、日韓関係は益々緊張の度を深めている。日韓の政権交代がどのような変化をもたらすのか注目される。日本では、メディアなどを通じて韓国という国家の「異常さ」が時に強調される傾向にある。ただ、その理解の仕方による基準を尺度とした日本の決めつけという側面が強い。現在の韓国を内在的に再考するためにも、本書はぜひとも読まれるべき書物の一つだと考える。

内在的に現在を再考するために

◇

おの・やすてる 1982年生まれ。九州大学大学院人文科学研究院准教授。専門は朝鮮近代史。博士(文学)。



韓国「建国」の起源を探る

読書

慶応義塾大学出版会
2017年刊

